

# 大規模 CBT 実施における標準手法

## ーAsia ATP のホワイトペーパーに基づく検討ー

齋藤 康寛

株式会社イー・コミュニケーションズ

### 1. はじめに

近年、高大接続システム改革で大学入試への CBT (Computer Based Testing)<sup>1</sup>の導入が検討されるなど、CBT に関する注目が高まっている一方で、日本では大規模な CBT を想定したテスト実施のガイドライン整備が十分な状態とは言えない。この度、グローバルなテスト業界団体である Association of Test Publishers (ATP) のアジア部門である Asia-ATP (A-ATP)が 2015 年に作成した、「大規模試験における標準手法に関するホワイトペーパー (White Paper on Standard Practices for Large-Scale Assessment Programs)」(以下、「本ホワイトペーパー」とする)を本学会に紹介する許可が得られたため、概要を紹介するとともに、既存のガイドラインと比較することにより、今後ガイドラインとして整備していくべき内容を検討した。

### 2. 本ホワイトペーパーの概要

本ホワイトペーパーは、米国の Council of Chief State School Officers (CCSSO)と、The Association of Test Publishers (ATP) が、2010 年に最初に出版した Operational Best Practices for Statewide Large-Scale Assessment Programs の 2013 年版 (以下、「Operational Best Practices」という)をベースに、Asia-ATP が Asia 向けにローカライズを進めているもので、その一部のチャプターを先行して Asia-ATP 会員向けに公表したものである。

Operational Best Practices は、ガイドラインとして守るべき基準を定めて制約を加えることを目的とするのではなく、テスト関連の業界に共通のベストプラクティスの情報を提供し、テスト実施の一助となることを目的としている。

また、Operational Best Practices は、2013 年度版を作成する過程において、「technology-based assessments」への対応のため大幅に改変されている。ここでいう「technology-based assessments」は、コンピューターを使用したテストを指し、CBT とほぼ同義である。本ホワイトペーパーは、その中でも特に「technology-based assessments」に関連した内容となっている、「Chapter 15. Technology-based Assessments and Technical Support」を含む 2 つの章を対象としており、今回の発表では、Chapter 15 の内容について紹介する。

### 3. "Technology-based Assessments and Technical Support" の内容

Chapter 15 は、本ホワイトペーパーでは 2 章に掲載され、以下の内容を含む。元の文書にはタイトルは無いが、本発表においては、便宜上タイトルを付与した。

No.	タイトル	内容
2.1	技術要件の定義	CBT を実施するにあたり、顧客とサービス提供者に必要とされる技術インフラの要件は、明確に定義され明文化されていなければならない。
2.2	デバイスやソフトウェアの仕様や設定の明確化	CBT による試験を安全に配信、管理するために必要とされるデバイスやソフトウェアの要件は明確に書面で説明されていなければならない。これらの要件は、マニュアルその他の書面で関係者に共有されるべきである。
2.3	アクセシビリティへの配慮	顧客とサービス提供者は協力して、CBT においてアクセシビリティを高めるためにどのような技術が利用可能かを検討するべきである。
2.4	セキュリティを考慮した技術や手順	顧客とサービス提供者に利用されるすべての技術や手順は、CBT 実施のすべてにおいて、セキュリティを維持すべきである。

<sup>1</sup> CBT は、狭義では Internet Base Testing (IBT) と区別するために、試験会場で試験監督での管理下で実施する形態のみを指す場合もあるが、ここではコンピューターを使用するテスト全般を指すこととする。

2.5	技術サポートの提供	電話、電子メール、WEB 経由でのドキュメントなどのカスタマーサポートを通じて、CBT に関する技術サポートが、サービス提供者から顧客に提供されるべきである。
2.6	会場構成に関する推奨事項の記載	技術サポート資料にはテストセンター、コンピューター室などの設定・構成についての推奨条件を記述すべきである。
2.7	トレーニングの提供	サービス提供者から顧客に対して、CBT に関するトレーニングが提供されるべきである。トレーニングは、WEB、直接、動画、資料など複数の形態で提供されることが望ましい。
2.8	性能の測定・監視と拡張性	サービス提供者のソフトウェアならびにシステムの性能は CBT の運営の成功において重要であるため、測定され、常時監視されるべきである。また、試験の規模の増加、試験の種類の変化、技術の変化に合わせて対応できるように拡張性を持つべきである。
2.9	システム変更の管理	サービス提供者により、機能向上、不具合修正、技術の変化や基準の変更、顧客の要求などに対応するためのソフトウェアやシステムへの変更が行われるが、そのプロセスは適切に計画、管理され、顧客やその他の関係者に事前に説明するコミュニケーションが適切に行われているべきである。

#### 4. 既存のガイドライン／スタンダードとの比較

既存のガイドライン／スタンダードとして CBT に関する記述があるもののうち、以下の 2 つとの比較を行った。

- 「テスト・スタンダード」／日本テスト学会（編）(2007). 金子書房
- ITC Guidelines on Computer-Based and Internet Delivered Testing. / International Test Commission (ITC) (2005).

以下では、上記のうち前者を「テスト・スタンダード」、後者を「ITC ガイドライン」とする。

本ホワイトペーパーの 2.1～2.4 については、テスト・スタンダード、ITC ガイドラインのいずれにも同様の内容が含まれるが、2.5～2.9 については、記載が無いが、ある場合も簡易な記載にとどまっている。記載内容にこのような違いが出ている背景としては、以下のような点が考えられる。

- 本ホワイトペーパーが大規模な実施における「ベストプラクティス」の情報を提供するという位置づけであるため、より実際の運用上の課題に基づいた内容になっている。
- 作成された時期がテスト・スタンダードが 2007 年、ITC ガイドラインが 2005 年と古いのに対して、本ホワイトペーパーの元となっている文書が 2013 年と、比較的新しいため、CBT 利用の実績に基づいた内容が追加されている。

今後、日本において大規模な CBT に対応したガイドラインを整備するにあたり、上記 2.5～2.9 に含まれるような技術サポート、トレーニング、性能の監視、システム変更の管理などの項目も盛り込んでいくことが望ましいと思われる。

#### 5. さいごに

本ホワイトペーパーを作成した Asia-ATP ならびに ATP は、日本での活動実績がまだ少なく、日本ではあまり認知されていないが、米国を中心に多くの団体が参加するテスト業界団体であり、テストに関する有用な情報を有している。今後、今回発表した資料の元となった Operational Best Practices の他の部分の内容や、ATP の保有する他の情報を精査し、有用な情報を発信していくことで、日本における CBT に関するガイドライン整備の一助になれば幸いである。

<参考文献>

International Test Commission (ITC) (2005).

*ITC Guidelines on Computer-Based and Internet Delivered Testing.*

日本テスト学会（編）(2007). テスト・スタンダード. 金子書房